## ２．ソフィア(София)

### 空港からホテルへ

閑散とした到着ロビーに出て、まずATMで現地通貨の調達だ。ロビーに待ち受けていたタクシー運転手達が声をかけてくる。ガイドブック（豪 Lonely Planet 社刊。以下英ガイドと略記する）によれば、空港で客引きをするタクシーは概ね法外な料金を要求するとのことで、相手にせず行き過ぎる。

クレジットカードでATMからのキャッシングにより400Lv(21,968円)を引き出した。この方式だと金利負担はあるものの、結局これが一番有利なようだ（P.20コラム参照）。ちなみにブルガリアでもATMは至る所にあり、キャッシングに不便を感じることは一度もなかった。

キャッシングを終えて、いよいよソフィア中央駅そばの宿へ向かう。英ガイド情報は小型シャトルバスがあるとは教えてくれるが、夜遅くに運行しているか判らないし、終点から宿へはそこそこ距離があり、それよりもタクシー利用の方が良さそうだ。ブルガリアのタクシー料金は格安だ。

しかし多いらしい雲助タクシー対策として英ガイドに従い、到着ロビーにある OK Supertrans taxi のカウンターを訪ねた。インターネット予約した宿の（日本で印刷した）英文予約票を見せる。これにより行き先を伝えることができた。値段を訊くと12キロもあるのに、12Lv(659円)とのことだ。

カウンター脇に立っていたオヤジが案内してくれる。運転手かと思ったが、単に案内役で駐車場の自社タクシーに引き継いでくれた。しかし彼がいなければ、（雲助タクシーを含む）大勢の運転手にまとわりつかれ難儀したものと思われる。タクシーに乗る前、空港の売店でミネラルウォーター1.5㍑を2.5Lv(137円)で買い、クレジットカードで支払う。安いと思ったけれど、物価の安いこの国では、相場の倍以上だった。

車は郊外道路を快調に走り、やがて繁華街を抜け、やや場末を感じさせる住宅街をしばらく行くと、今宵の宿ホテル・アリスの前で停車した。請求にチップを足し13Lv(714円)支払う。

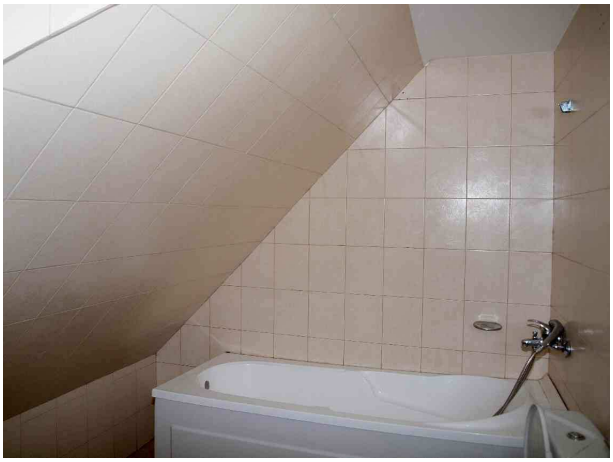
ガラスの開き戸を引き開けてロビーに入る。左手にカウンターがあり、60歳位のオヤジが一人いるだけでロビーは無人だった。予約は簡単に確認でき、パスポートを渡し、用意された部屋を見せて貰う。

彼が先に立ちエレベーターで6階へ、突き当たりの部屋は8畳ほどの角部屋で、二方向に窓がある。最上階なので浴室は天井が屋根の傾斜になっているが実用上問題はない。満足した旨を伝えロビーに戻った。

泊まった部屋。翌々日の出発直前に撮影。

チェックインの手続きは簡単に終わり、近くにこの時刻で利用できるレストランがあるか訊いてみたが、ないようだ。モスクワでサンドイッチを調達しておいて良かった。

外食できないので、荷物をまとめ5階へ上がる。先ほどと異なり一人なので、落ち着いて周囲を観察しながら部屋へ向かった。この階に客室は一つだけらしい。珍しいけれどとにかく余人を気にせずに済むのは歓迎すべきことだ。



浴室。左側部分が屋根により削られている。シャワーカーテンがない。

部屋に入りざっと荷物を片付け、成田で買ったタンカレー・ジンとモスクワのサンドイッチ、そしてカバンに詰めておいた柿ピーとアーモンドを取り出しテーブルに並べる。

明日も此処に連泊するつもりだし、急いで見に行きたいところもない。約一年ぶりの海外で、何となく緊張していた意識を溶きほぐしながらゆっくりと晩酌を楽しむ。就寝したのは日付が替わるころだった。

2時頃に目を覚まし、少し室温が低めに感じられた。寒いというほどでもなかったが、エアコンを運転してみた。しかし待てど暮らせど温風が吹き出さず、それでは単なる騒音源だ。スチーム暖房も設備されているので、これのバルブを開いてみたが、ボイラーが稼働していないらしく、これも一向に暖まらない。

なぜかこの部屋には対流式の電気ストーブも置かれていた。これの電源をコンセントに差し込み、ようやく暖を取ることができる。先走って云えば今回の旅でトラブルらしいものはなかったのに、なぜか暖房だけは不調が続くのだった。

## ソフィア徘徊

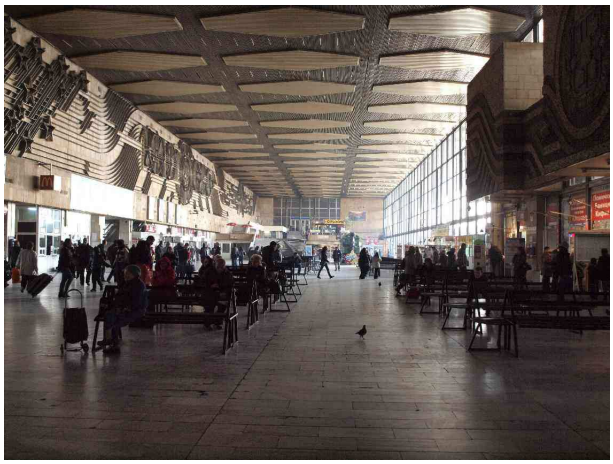
翌31日は高曇りの気持ち良い朝を迎えた。昨晩、「朝食は7時半から。」と云われたので、その時刻にロビーに降りる。

昨晩のオヤジがフロントの中で壁に掛けられたTVを見ていた。声をかけるとちょと待てとロビー片隅のバーから裏手へと姿を消す。バーカウンターで朝食かと思ったら、バーの裏手に朝食堂があった。

品揃えは食パンと菓子パンが一種類、飲み物がピッチャーに入ったオレンジジュースとネスカフェのサーバー、それにオヤジが運んできた大皿に並ぶスライスハムとチーズだけ。ごく簡素なものだけれど、これがブルガリアにおける宿の一般的朝食と行く行く判った。

宿の朝食。コーヒーはインスタントだし、食べ物はこのあとスライスしたハムとチーズが追加されただけ。しかしこの宿に限らず大体どこでもこの程度で、そもそもブルガリア人は朝食はコーヒー程度で、ほとんど食べないらしい。

菓子パン一個を囓り、食パン一枚にはハムとチーズを載せ、オレンジジュースで流し込む。10分ほどで簡素な朝食は終わった。しかし部屋でぐずぐず時間を過ごし、9時近くなって街へ出た。まず市街北部のソフィア中央駅向かったのは、明日移動するのに鉄道利用を第一候補としていたからだ。



ソフィア中央駅。

ソフィア平面図

気温は4℃で若干寒い。徒歩10分足らずで駅舎に辿り着いた。コンコースは巨大で、行き交う人も多い。発着する列車は少ないし、乗降客もさほどではないこととそぐわないけれど、理由は良く判らない。

明日はブルガリアの西端で、黒海に面するブルガスまで400キロほどを一気に行くことを考えていた。トーマスクックの時刻表で下調べはしたものの、この情報はそれほど信頼できるものではない。そんなことでコンコースの壁面に表示された巨大電光掲示板を見上げた。

ところがキリル文字のみで表示されているため、さっぱり読めない。ソフィア、ブルガスはそれぞれ、София、Бургасだから、キリル文字が頭に入っていなくても、気合いを入れて調べそれをメモなどに書き写してくれば、時間はかかっても解決するはずだ。しかし旅も始まったばかりで、そこまでできる態勢ではなかった。

しかし（誤用ではあるが）犬も歩けば棒に当たるで収穫があった。information の看板があり、小さなブースにオバサンがいる。Sofia→Burgas と書いたメモを差し出すと、彼女は傍らの用紙（PCのプリントアウト反古紙を切ったもの）を取ると、即座に全6便の出発と到着時刻を書きだしてくれた。

さらにはドアを開けてブースから出てくると、英語で乗り場などに関する情報を、指差しながら教えてくれる。予想だにしなかった親切な応対は、始まったばかりの段階でこれから先続く旅に対する明るい展望をもたらすものだった。

できるだけ心を込めて礼を述べる。駅探訪をもう少し続けた。プラットフォームに出てみと、必要と思われるスペースの倍か三倍ほど広い。遠くに見える客車や機関車はいずれも古色蒼然とし、日本では先ず見かけないような代物だ。

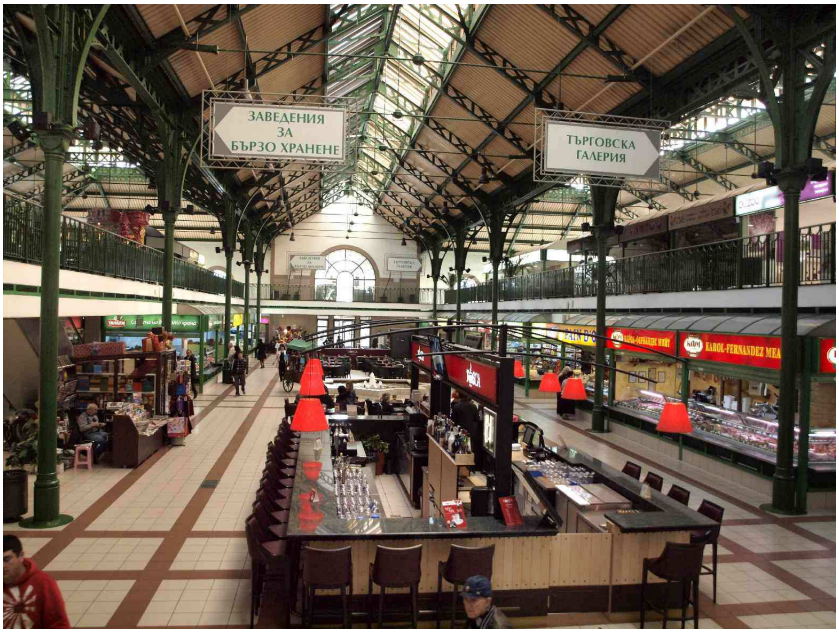
この国でも鉄道は公共輸送主役の座をバスに譲ってしまったようだ。しかし列車旅が好きだから、明日の移動手段を替える気はなかった。

駅構内にあったマクドナルドの店舗。プレハブ建物のような感じだが、臨時店舗と云うことでもないらしい。

中央駅を離れ、ソフィア道路網の背骨とも云えそうなマリア・ルイザ通りを南下する。道路の中央にトラム（路面電車）の線路が敷設され、その外側に二車線の車道、さらに分離帯の外側に一車線の車道が設置された贅沢な設計だ。運行容量に比して走行する車輌は少なく、沿道には商店やオフィスもあるものの比較的閑散とし、全体的に場末の雰囲気だ。

| ブルガリア・日本比較表 | | |
|---|---|---|
| | ブルガリア | 日本 |
| 面積 | 110,910㎢ | 377,914㎢ |
| 人口 | 7,545,000人 | 128,056,026人 |
| GDP（PPP:購買力平価） | 935億＄ | 4兆3,095億＄ |
| GDP（1人あたり） | 12,340＄ | 33,805＄ |
| 首都の年平均気温 | 9.9℃ | 15.9℃<br>8.5℃（札幌） |
| 乗用車1台当たり人数 | 2.6人 | 2.2人 |
| 1人あたりワイン生産量 | 21.2リットル | 0.7リットル |

中央市場セントラル・ハリ。




セントラル・ハリ内部。

10分ほど歩くと川があり、袂にライオンの彫像があるその名もライオン橋を渡った。側道がなくなり、通りの雰囲気も一変して、街一番の繁華街を思わせる。

歩道はかなり混雑し、洒落た商店が軒を並べている。しかしファッションなどに興味がないから、ウィンドウショッピングすることもなく、漠然と行き過ぎた。

ライオン橋から10分ほどで、左手に公園風のスペースがあり、モスクのミナレットが見えた。ブルガリアはトルコ支配下が長かったこともあり、イスラム教徒が人口の12％ほどを占める。眼前に現れたバーニャ・バシ・モスクは、オスマントルコ時代に建立された由緒あるもので、今なお信仰の場として現役だ。

そして道路を挟んでモスクに向かい合うようにして格調高い建物があった。一見したところ官公庁の類かと思ったけれど、それにしては出入りする人が多いし雰囲気も何か異なる。ともかく中を覗いてみることにした。

ガラスのスイングドアを押して入ると、予想外の食品ショッピングセンターだった。中央部分は吹き抜けで、屋根の梁や支柱の鉄骨が剥き出しのままなのは、ヨーロッパの古い駅舎を彷彿させる。1911年の建築だから、当時の流行だったのかもしれない。しかし100年を経た今見ても、垢抜けた美しさが感じられた。これがセントラル・ハリと呼ばれる中央市場だ。

独立した店舗が入居しているらしく、一番多いのは食肉店で、ハムやチーズもショーウィンドウに並んでいる、パン屋も数軒、それに関連してジャム類などもある。

中央部と二階はカフェテリア型式の飲食店で、買い物客が一服している姿などが見かけられた。10時半と買い物には半端な時刻だったせいか、場内の全体的雰囲気は閑散としたものだ。

一通り見て廻る。ハム類が美味そうだし値段も安い。しかし腹の具合が不穏なので買い物は後回しにし、一旦宿へ戻った。

交番のことをポリスボックスなどと云うが、これは正にポリスボックス。ただし内部は無人だった。

聖ネデリャ教会。

トイレを使用し、買い込んだ食料を冷蔵庫にしまう。しかしなぜか冷却できないので単なる収納庫だ。

宿まで戻ったついでにガイドブックを読み直す。私の英語力では斜め読みなどできないし、道端で（時として辞書など引きながら）立ち読みするのは、旅人を狙う犯罪者の標的になりかねない。その確率は低いにしても避けた方がよいだろう。

とはいえ、実際にはガイドを読むより地図参照が主で、観光案内所や、主要教会の聖ネデリャ教会と、インターネットにアクセスできるはずのBTCセンター、そして昼飯をと考えた（英ガイドが特に推奨する郷土料理店）マナストリスカ・マグネリッアの位置を確認し、順路を決めた。

先ほど到達したバーニャ・バシ・モスクから聖ネデリャ教会は3分ほどのところにある。この教会は聖アレクサンドル・ネフスキー大聖堂が1912年にできるまでは主教座が置かれていた。

創建は10世紀に遡るともいわれ、数回の改築が行われたらしいが、19世紀半ばまで木造であった。1856年から7年を費やし、奥行き35.5メートル、幅19メートルの石造り大聖堂となる。

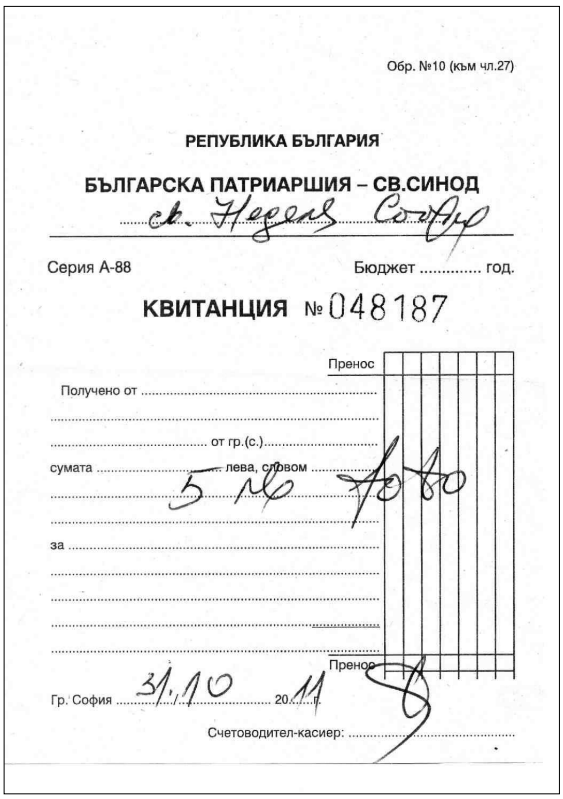
1925年にブルガリア共産党のテロ活動により爆破され、150人以上の死者が出た。現在の建物はその後の1933年に修復（完成）したものだ。しかし外観も内部の雰囲気も、荘厳なもので一見に値する。

由緒正しさゆえか、御利益のため、はたまた立地の良さ（交通至便）によるのか、ともかく信者の訪れは引きも切らない。

これまで正教会の聖堂に何度か足を踏み入れたことがあるけれど、これまで目にしなかった光景は、入り口付近にガラスにより囲まれた売店があり、訪れた信徒はほぼ間違いなく此処で蝋燭を購入することだ。そして目指す聖像やイコノスタシスの前に進むと、設けられている燭台に灯した蝋燭を献じるのだった。

これがブルガリア独自のスタイルなのか、これまでも（実は）目撃しながら意識に残っていなかっただけか、あまり自信はない。

聖ネデリャ教会のイコノスタシス（聖障と訳される。正教会で内陣と至聖所を区切る、イコンで覆われた壁）。



Обр. №10 (към чл.27)

РЕПУБЛИКА БЪЛГАРИЯ

БЪЛГАРСКА ПАТРИАРШИЯ – СВ.СИНОД

св. Неделя София

Серия А-88 Бюджет ..... год.

КВИТАНЦИЯ № 048187

Пренос

Получено от .....

..... от гр.(с).....

сумата ..... лева, словом .....

5 лв 70 ст

за .....

Пренос

Гр. София 31.10 20 11 г.

Счетоводител-касиер: .....

撮影料領収書（2／3に縮小）。квитанцияがブルガリア語で領収書。

（この時点では知らなかったが）ブルガリアの教会はどこも原則撮影禁止だ。此処では撮影禁止である旨の注意書き隣に、5Lv（275円）支払えば撮影できることも記されていた。

ざっと堂宇内を見回し、撮影対象としてさほど魅力はないと感じたものの、料金は安いし、ともかく撮影しておけば何を見たか紀行文執筆時の資料になる。迷わず支払うと領収書用紙に日付や項目などを手書きして渡してくれた。

かつてポーランドのユネスコ世界遺産である、ヴィエリチカ岩塩坑で撮影料を支払ったときは、粘着式のワッペンを渡され、胸などの目立つ場所にこれを貼り付けて許可済みであることを明示した。このような方式が合理的だと思う。しかしその一方で、神聖なる場所に対する許可ならば合理性とは無縁でよいのかと、変に納得してしまう。

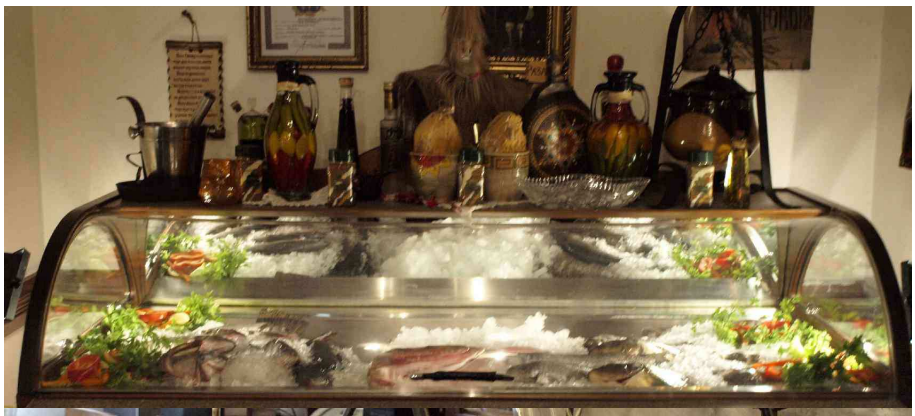
結局撮影したのは5枚だけで、時間的にも10分弱で教会を退去した。引き続き、英文ガイド地図によれば至近距離にあるはずの観光案内所を探す。しかし該当ポイントの周辺を虱潰しに探しても見付からない。帰国後インターネットで調べてみたら、全く違う場所だった。引っ越したのか、単なる間違いなのか、ともかく半時間ほどを空費した。

次はインターネットでメールをチェックしようと、BTC（ブルガリア電話会社）センターに向かう。此処はPCを利用した仕事（いわゆるオフィスアプリケーション）もできる場らしい。十数台のPCが用意されていた。

空いているPCもあり、係りの女性に訊くとすぐに利用できた。しかし良かったのは此処までで、漢字が文字化けする。先ほどの彼女に尋ねてもそんなスキルがないのか、サービス対象外と云うことなのか、とりつく島もなかった。

## ブルガリア料理

12時ちょっと前だけれど、早々インターネットは諦めて、食事をターゲットにする。ブルガリアにおける、「主たる昼食時間」がどんな具合か判らないものの、ガイドブック情報では11時から開店しているから、ともかく食事はできるはずだ。



上：マナストリスカ・マグネリッアの素材ショーウィンドウ。下：太い薪の熾火でシチューを煮、肉を焼く。肉焼き装置は電動で回転していた。

BTCセンターから500メートルほどだから、注意深く地図を参照しながらでも10分かからないで辿り着いた。

19世紀のタウンハウスを利用した店は、街路から建物までのちょっとした庭にもテーブルがセットされている。外で食事するのは好きだけれど、この日の気温ではさすがに尻込みした。

しかしブルガリア人は寒さを厭わず外でも食事をするらしく、この店に限らず10℃以下でも屋外テーブルを準備するレストランはその後の旅で数多く見かけた。

閑話休題。英ガイドはこの店を「特にお奨め（our pick）」とし、ブルガリア全土の郷土料理を集めていると紹介している。しかしブルガリア料理を初めて食するものにとって、このように選択肢が多すぎるのは、かえって何を注文したらよいかを判らなくしていた。

しばらく英文メニューを見たものの、上記ハンディキャップに加え、メニューを理解するのに苦労する英語力だ。早々諦めて、ウェイターを呼ぶ。サラダ、スープ、メインのそれぞれについて、「典型的ブルガリア料理」という条件でお奨めを訊いた。

郷土料理店として名が通っているから、国外からの客も多いらしく、彼は手慣れた感じで分厚いお品書きリストから、盛り合わせサラダとチキンスープを推奨し、メインは牛、豚、鶏、羊、魚のいずれにするかを尋ねる。

それほど好む素材ではないけれど、日本では良いものが手に入りにくい羊を選んだ。ラムシチュー・トラキア風が決まる。

あとはワインの選定だが、ブルガリアワインなど、（多分初めて飲むもので）事前に学習もしていないからまるで判らない。これもお奨めに従い、ワインリストの値段を横目でにらみ、さほど高くないことを確認の上ユニカト・メルニックにした。ワインが出されるまで、入店時に見かけた焼き肉装置（前ページ参照）などを撮影に行く。こんな風に焼かれたものが、本当に美味かは疑問もあるが、食欲をそそることは間違いない。席へ戻って間もなく、ワインが到着した。癖もなく飲みやすい赤ワインだ。一緒に運ばれてきた自家製パンは、蒸しパンのような感じの、表皮、中身共に柔らかく食べやすいものだった。

続いて盛り合わせサラダ。予想と異なりハムやチーズなども合わせたそれは、日本であればオードブルの盛り合わせと呼びそうだ。量的にはたっぷりある。

どうにかサラダが片付いたところでチキンスープが登場。鶏肉は好みでないものの、この鶏は美味かった。

上：自家製パン。軟らかい。中：盛り合わせサラダ。下：チキンスープ。

上：ラムシチュー・トラキア風。下：シチューを一緒に供されたご飯に掛ける。

スープが終わったところで既に満腹の気分だが、メインはこれからだ。ラム肉がトロトロに煮込まれたシチューは、スパイスの加減も好みにあったものだったし、ご飯に掛けて食べるスタイルも日本人向きだった。

味や食感には大いに満足したものの、何しろ量的には完全に超過だ。この取り合わせそのままで良いが、二人で分け合うことができたら申し分なかったと、繰り返し思いながら飲み下す。

結局完食はかなわなかったけれど、概ね片付け、食後のミルクコーヒーを所望する。もちろんデザートなどは論外だ。

勘定はワイン1本49.8Lv(2,735円)、サラダ8.8Lv(483円)、ラムシチュー18.8Lv(1,032円)、スープ2.8Lv(154円)、コーヒー2.8Lv(154円)、ミルク1.2Lv(66円)で、合計84.85Lv(4,660円)だった。

ワイン1本を飲んでいるので、日本や西ヨーロッパの感覚では高くないものの、今回の旅では一番高価な飲食費となった。クレジットカードで支払い、多少のコインをテーブルに置く。

ちなみにコーヒーとミルクは混ざった一杯が供されたのに、勘定書ではそれぞれ別項目扱いだ。これがブルガリア流で、この後も繰り返しミルクコーヒーを飲んだが、どこでも必ずレシートには二項目に別れて印字されていた。

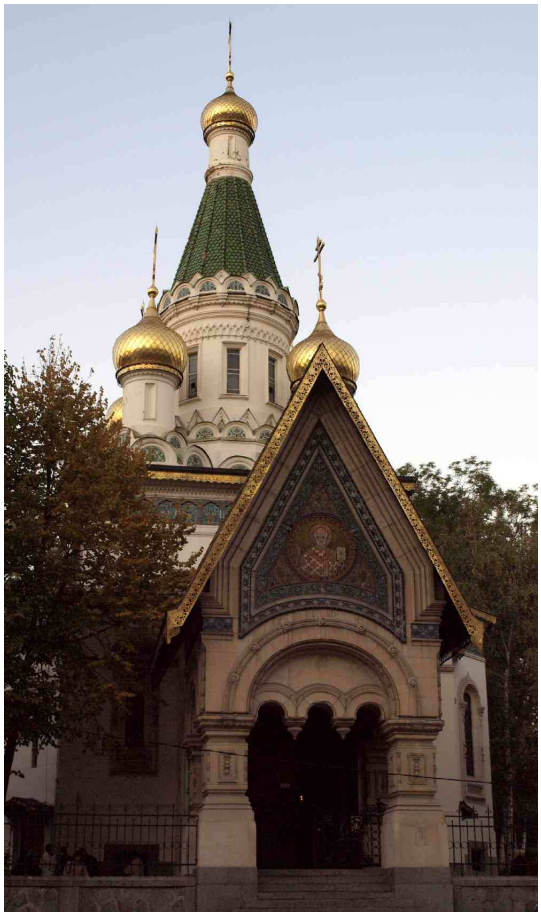
店を出ると1時半になっていた。ともかく宿へ帰って食休みだ。それでも道すがらセントラル・ハリにより、チーズ163㌘1.63Lv(90円)、パン0.89Lv(49円)、ハム232㌘4.62Lv(254円)、ミルク1㍑2.2Lv(121円)を買い込み、デイパックに詰め込んだ。

荷物が増えたこともあり、タクシーで帰る。昨晩利用したOKタクシーが客待ちしていたので、ホテル・アリスまでの値段を訊くと5Lv(275円)だと云う。日本感覚ではあり得ない安値に、嬉々として乗り込んだ。

### アレクサンドル・ネフスキー教会

一眠りし、日が傾きはじめた頃に散歩がてら街へ出た。一応アレクサンドル・ネフスキー教会を目指す。ところがバーニャ・バシ・モスクから道を間違えてしまった。

公園でバグパイプを吹く男。バグパイプはブルガリアでも伝統的な楽器で、ガイダと呼ばれる。この演奏は人通りの少ないところでだし、集金する様子もない。練習中か？



聖ニコライ教会。

未だに手頃な市街平面図が手に入らず、ガイドブックを片手に歩くのも嫌で、一応地図を頭に入れたつもりが駄目だった。辿るべき道より、一本南の通りを行き、聖ニコライ教会を撮影できたのは収穫だったが、距離的には充分歩いたはずなのに、一向にアレクサンドル・ネフスキー教会が見えてこない。仕方なく英ガイドを取り出し地図参照の上、軌道修正した。

アレクサンドル・ネフスキー教会は、「バルカン半島で一番美しい教会。」と評する人もいる。規模としてはバルカン半島で最大規模、世界的に云っても正教の教会としてはやはり最大規模だ。しかし歴史的には比較的新しい。1877年にトルコ支配から解放された後、露土戦争死者の慰霊などを目的とした教会設立の機運が生まれ、1882年に定礎式が行われる。建設資金は半分を国家予算、残りを個人からの寄付によることとした。ロシアからも多大な援助が行われた。

実際に着工されたのは1902年で、1912年に竣工する。しかし13年からバルカン戦争が始まり、その後に第一次世界大戦もあり、落成式が行われたのは12年後の24年となった。

公園風の緑地帯に設けられた遊歩道から教会に近付く。黄昏の薄暗がりが、教会の窓を内側から橙色に浮かび上がらせているのが印象的だった。

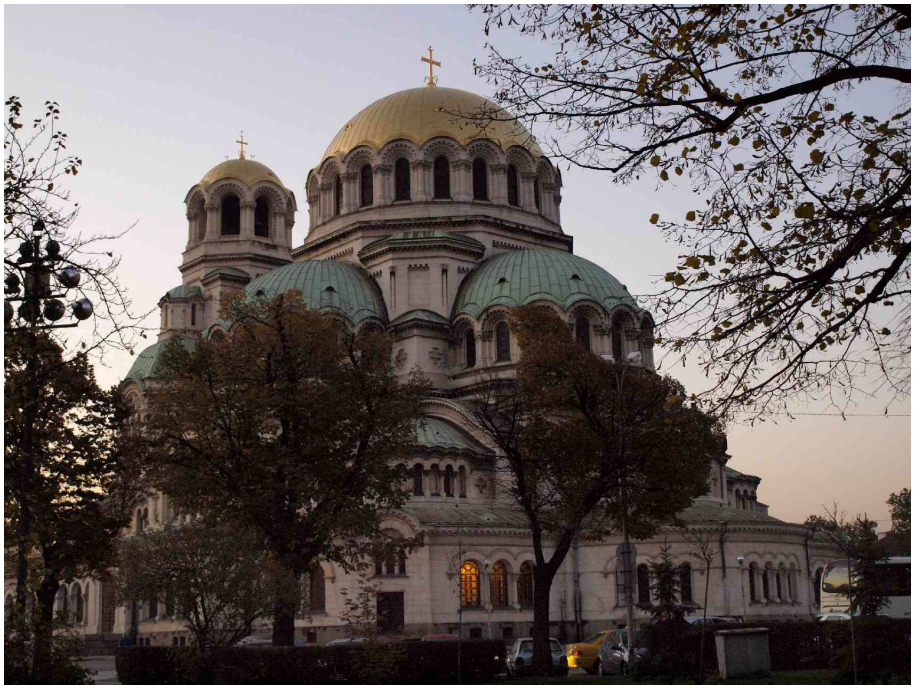
真裏に辿り着いたので北側から正面に回り込む。ファサード側に入り口があった。下へ降りる階段なので、訝しく思いつつも行ってみると、地下に設けられたイコン博物館だった。収蔵品のレベルは高いらしいが、イコンに興味がないので踵を返す。

改めて正面玄関へ。重厚なオークの扉が八の字に開かれている。内部に入ると数人の信徒が思い思いに祈りを捧げたり、イコンに口づけをしたりしている。

イコノシスタの豪華さや、壁、天井に描かれたモザイク画は素晴らしいが、撮影禁止だったため、日々その記憶は薄れてしまった。しかしそれほど深く感銘を受けなかったことは、滞在時間の短さがその証だろう。

改めて考えるとカソリックの大聖堂がほぼ共通して持つ様式美に比して、正教のそれはあるにしても私との相性は悪いようだ。一通り堂宇内を巡ると、それだけで退出する。

5時40分を廻っていた。この日、ソフィアの日没時刻は5時20分なので、辺りはすっかり黄昏れていたものの、ネフスキー教会はじめいくつかの建物はライトアップされ、街



裏手から見る、アレクサンドル・ネフスキー教会。

ライトアップされたDSK銀行ビル。

灯も多いので、夜道は明るい。

宿のそばまで来て、裏通りを歩くが、不穏な気配は全くなくて、女性や小学生が普通に通行している。宿から指呼の間にある食料品店で、ミネラルウォーター1.5㍑を0.8Lv(44円)で買った。空港と比べれば三分の一以下だ。

7時に晩酌を開始した。昼間セントラル・ハリで買ったときは、レバーペーストと思い、それ故にパンも買い求めたのだが、開封してみると、クリームチーズだった。

ショーケースに表示札と一緒に置かれているのを見たとき、目分量(100～200㌘)のものが9.99Lv(549円)ならば、多分レバーペーストと思った。しかしレシートを良く見ると、9.99Lvはキロ単価で、1個当たりでは1.63Lv(90円)だ。日本ならばこちらを表示するだろう。要するにそれを買い求めたとき払う金を知りたいか、品質を想定するために単位重量価格を求めるか、文化の違いだと思う。

## ３．ブルガス(Бургас)

### ブルガリア列車事情

11月1日も高曇りで風のない穏やかな朝を迎えた。前日の下調べ結果から、10時45分発でブルガス到着が午後5時50分の列車を利用するつもりだ。

駅までは10分かからないので、早々と朝食を済ませた後は、部屋で読書などに時を費やす。それでもせっかちな性分なので10時10分にはチェックアウトした。

インターネット予約は一泊29€(56.84Lv)だったのになぜか二泊の合計は113.1Lv(6,211円)と安い。僅かな違いにせよ、悪い気分ではなかった。

帰国前日にもソフィアに泊まるので、この宿に決めて一ヶ月後の予約をした。そのときフロントの女の子(オバサン？)は、「予約するときはインターネットなど使わず、直接電話かメールを頂戴。」と云う。予約システムに払う手数料ゆえだろうか。

一連の流れで気安く話ができる雰囲気になり、ふと思いついて中央市場セントラル・ハリからのタクシー料金相場を尋ねる。彼女にしてみれば、通常そのような利用はしないのか、隣にいた同僚にちょっと確かめたりして結論は3Lv(165円)ぐらいだった。昨日嬉々として乗ったのは、率的に云えば7割近くぼられていたことになる。腹も立たないが、ブルガリアのタクシー料金が格安であることを改めて認識した。

ホテル・アリスの外観。下からだと塔のように見える6階の部屋を利用した。